

出題分析			
試験時間	120 分	配点	100 点
		大問数	3 題
分量 (昨年比較) [減少	同程度	増加]	難易度変化 (昨年比較) [易化
			同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>I の日本語長文による読解問題は、文章が複数提示される年と 1 つの長文を用いる年があるが、今年は気候変動問題に対する取り組みと貿易の関係について述べた A、B 2 つの文章が取り上げられた。昨年は本文中に複数のグラフが含まれていたが、今年はそれがなくなり、文章の量は昨年よりもやや増加している。空欄補充問題中心の設問構成、図を用いた読解問題や 100～200 字前後の記述問題が含まれる点は例年通りであった。</p> <p>II は英語長文読解問題であった。昨年は 2 つの文章が題材であったが、今年は 1 つに戻った。例年出題されていた文整序が姿を消し、空所補充と内容一致が主に出题された。</p> <p>III は自由英作文であった。今年は与えられた主張への反論と自身の意見が求められた。テーマは II の内容と関連したものである。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	総合問題 (和文) A 上野貴弘『グリーン戦争』 B 有村俊秀・日引聡『入門 環境経済学 (新版)』	A、B ともに気候変動に対する政策の強度が国によって異なるために行われる、貿易時の価格調整について説明した文章。記述問題は本文の内容説明が求められた昨年と異なり、今年は筆者の意見に対する自分の賛否を明らかにしたうえで、本文を踏まえた論拠を示すことが求められた。抜き出し 2 問、空欄補充 2 問、本文内容を図示する問題 1 問、内容合致 1 問、意見論述問題 1 問の構成。	標準
II	総合問題 (英文) 「世界の教育の現状と今後の課題」	国際連合経済社会局による、世界の教育の状況に関する政策提言書を題材に、選択式 7 問と記述式 1 問が出題された。昨年は文章が 2 つだったが、今年は 1 つに戻った。空所補充と内容一致が主で、文整序や、計算を要する出題はなかった。英文は比較的読みやすいが、設問の難易度の差が大きく、一部の設問は明確な根拠を持って解答することが難しい。	標準

設問別講評			
Ⅲ	自由英作文問題	「外国人学生の大学入学」に関して、与えられた主張の問題点を示し、それを踏まえて意見を述べる自由英作文問題である。解答欄の行数は昨年と同じ25行で、150～200語程度が目安であろう。主張の問題点をどのように指摘すべきか悩ましく、昨年よりも書きにくい。題意の取り違えや、文法・語法のミスに注意しながら自分の意見を明確に述べたい。	やや難

合格のための学習法	
<p>日本語の文章による出題では、本文の純粋な読み取りに加え、図表の読み取り、複数の長文の関連付けや比較なども求められる。対策としては、まずは現代文・小論文の徹底した演習を行いつつ、これまでの全ての過去問と、可能であれば2020年の3月と7月に公開された、「サンプル問題」にも取り組んでおくこと。それらと並行して、過去問を調べて関連しそうなテーマの新書版書籍などを日頃からよく読むようにしておこう。特に社会問題・政治・経済の話題を扱った様々な議論に、前もって親しんでおくとうまいだろう。</p> <p>英語の文章による出題では、分量が多いものの比較的読みやすい文章が扱われる傾向にあるようだ。設問の出題形式は幅広く、年によっては数値計算が必要な設問も出題される。図表の読み取りや数値の処理が求められる設問は、専門知識が必要なわけではなく、設問文をよく読めば対処できるものである。したがって、まずは英文の論旨を正確に把握する力を養成することから始めよう。また、自由英作文問題の対策として、一貫した意見を英語で表す練習もしておきたい。</p>	